地域密着型インターンシップ研修最終報告

2011 年 6 月 17 日

7 期生　ニックネーム　こうべっこ

【研修目的】

福島の復興に何らかの形で貢献すること。そして、将来的にシェア住居型もしくは簡易宿所型ゲストハウスの運営を行いたいと考えており、宿の経営について勉強することを本研修の目的とする。

【研修内容】

① 被災地の現状把握・物産販売・炊き出し・仕分け

② 東山温泉の旅館「原瀧」における避難住民への食事提供・観光協会の業務補助・東山温泉を中心とした地域研修

③ 原瀧総支配人による観光と宿の経営、観光による地域活性化についての講義・シンポジウムへの参加

以下に①と②について述べる。

① 被災地の現状把握・物産販売・炊き出し・仕分け（研修場所別に記載）

・いわき市の皆様とのいわき復興に向けた話し合いに参加

5/24（火）いわき市を訪問。ニイダヤ水産賀澤社長を始め、いわき市の方とのいわきの復興に向けた話し合いに参加。いわき市は 5/24（火）時点で福島第一原子力発電所事故に伴い、福島県双葉郡広野町の住民を受け入れている状態。いわきの方は１０月を目途に観光にシフトしたい意向を述べていたが、見通しが不透明であること、そして観光客が来るのかということで非常に不安を抱いていた。また、生産者の方は「商品を作っても買っていただけるのか」という不安、「やったってしょうがねぇよ」という再開への気力喪失といったメンタルの不安をのぞかせていた。しかし一方でロシアからハチミツを輸入して加工品の一部にしようという動きを見せる方も。コストや販売先、用途、量、輸入方法、検疫等の問題が山積してはいるが、前向きに動き出すことが大切だと力説していただけた。

話を伺い、いわき市復興に向けて「何とかしよう！」という熱い想いを感じた。また、直接被害を受けた建物・物品を修復させるのみならず、風評被害への取り組みや、被災された方々や事業者様の心理面でのサポートが必要だと痛切に実感。

日々行うことや希望がなければつらいといった被災地のリアルな現状を目の当たりにして、現場へ足を運ぶことの大切さ、現実を知り直視することの意義を実感。

△いわき市沿岸部の様子

・元気玉プロジェクト本部にて支援物資の仕分け

避難をされている方々への長期的な支援を行う元気玉プロジェクト。その本部で、5/25（水）に支援物資の仕分けを行いました。元気玉プロジェクトによって、避難をされている方に物資や物資を送った方々の気持ちが届くことは素晴らしく思う。しかし汚れが目立つ服やパーツの一部しかないおもちゃなど、扱いに困る物資も。支援とは？

・自衛隊員向けの炊き出し（南相馬市馬事公苑）・南相馬市の被災地状況把握

5/26（木）「自衛隊員向け」炊き出しを行う。支援に携わる方への支援というものは、被災者への直接支援に比べて見落とされがちではないかと常々感じていた。そして実際に隊員の皆様の笑顔や「ごちそうさま、ありがとう！」の言葉を聞くことで、やってよかったと強く感じました。しかし鶏肉を解凍し忘れるなど、準備段階のミスも。担当が違うということで心のどこかに他人事のようにとらえていた部分があり、「当事者意識」を持って物事に当たることの大切さを実感しました。

△原町火力発電所も施設が損傷

南相馬市の被災地状況把握も行い、被害の大きさに絶句。

・山際食彩工房

5/27（金）キュウリとラー油のお漬物「カッパラー」のラベル貼りやダイレクトメールの発送準備を行う。製品の仕上げであり、シールや手紙を汚す、あるいは雑に扱うと、それまでに多くの方が積み重ねてきた想いが台なしになる。また、仕上げによって製品の第一印象が決まる。受け取っていただく方や製品を作り上げてきた方の想いを感じながら作業を行った。また、ダイレクトメールの発送や工房への来客から、山際シェフの多岐にわたる人脈や積極的にアドバイスを送る姿勢、生産者の方々との深い繋がりに感銘を受けた。日本の食について真剣に考え、行動されている方々を目の当たりにして、食に対する想いを強くした。これからは作り手の想いを感じ、食を大切にすることを心がける。

・新潟市古町、宮城県名取市「ゆりあげ朝市」物産販売

5/28（土）・6/12（日）に新潟市古町で物産販売を行う。物産販売を通して、お客様が喜ぶ、生産者も意欲を高めるといった効果が期待できる。また、新潟市古町の活性化にもつながっているといえる。

古町はアーケード型商店街や百貨店等が街を形成する商業エリアであるが人通りが少なく、政令指定都市の商店街とは思えない寂しさ。背景としては、古町はかつて賑わいを見せていたが、南側に位置する万代橋エリアのダイエーに客を奪われ、しかもダイエーが閉

店して、お客様が郊外に立地するイオン等を利用することで古町が衰退したということ。そんな古町を活性化しようと活動している団体が、この度の物産販売を主催するＮＰＯ法人「Ｍａｄｅ　ｉｎ　越後」。

「Ｍａｄｅ　ｉｎ　越後」は人やモノ・自然などを大切にして美しく豊かなふるさと新潟を魅力的に創生していくという理念に基づき、高齢者宅への配達や買い物代行、親子料理教室、越後の逸品販売等を行っている。中でも興味をひくものが、主婦や学生など一般の方が一日だけシェフになってランチを提供する「ワンデイシェフ・システム」を行う、「コミュニティハウス　田から屋」の事業。レストランを開業したくても資金不足で開業に踏み出せない人、空き時間を有効活用したい主婦等が気軽に使え、まさに「場の提供」が人を幸せにする好例である。

また、「Ｍａｄｅ　ｉｎ　越後」は会費や助成金に頼らず事業収入によって運営が継続できる事業型ＮＰＯ法人である点にも注目したい。

△コミュニティハウス　田から屋

5/29（日）には宮城県名取市ゆりあげ地区の朝市での物産販売を行う。天気が雨。朝市にお客様が来るのかと思いきや、多くのお客様で賑わい活気あふれる朝市となった。名取市や会津若松、私の地元神戸、名古屋、東京、米沢といった各地より出店があり、ゆりあげを盛り上げようとするエネルギーがお客様にも伝わったのではないか。

売上自体は小粒であっても、このようなイベントで人と人が結び付くことにより、お客様に物産やエネルギー・想いを届けることができ、また、お客様から我々売り手側も励ましのお言葉をいただき、地域・物産への関心の高まりを感じることが出来る。お互いにとってプラスとなり、イベントを開く意義を強く実感。

場が出来ることで人と人とのドラマが生まれ、その後の人生にプラスとなる、そんな仕組みや機会が増えれば増えるほど社会が活性化されるのではと強く実感。

・「ＧＡＭＢＡＲＵＺＯ！ふくしま　２Ｄａｙｓ　ｉｎ　いなわしろ」

6/4（土）・5（日）の二日間、リステルパークにおいて「ＧＡＭＢＡＲＵＺＯ！ふくしま　２Ｄａｙｓ　ｉｎ　いなわしろ」が行われ、会場内緑の広場にて物産と焼きそばの販売を行った。リステルには福島県双葉郡双葉町の住民が避難。故郷に帰れない方々の苦しみは言葉には表せない。このイベントを通して少しでも癒しや感動を得て、希望を持ち続けていただけたなら幸い。

② 東山温泉の旅館「原瀧」における大熊町の皆様への食事提供・東山温泉観光協会の業務補助・東山温泉を中心とした地域研修

東山温泉の旅館「原瀧」にて１１日間・東山温泉観光協会では１４日間・地域では１日、研修を行った。

【大まかな一日のスケジュール】

１０：００　東山温泉観光協会周辺＆
　　トイレ清掃、各宿泊施設の
　　避難者受入人数を集計

１１：３０　原瀧にて大熊町の皆様への
　　食事提供

１４：３０　東山温泉観光協会にて
　　事務作業、窓口・電話対応

１６：００　終了

・東山温泉の現状

会津若松市郊外の渓流沿いに２１軒の宿泊施設と数件の商店が並ぶ東山温泉。現在は福島第一原子力発電所事故に伴い、福島県双葉郡大熊町より避難生活を強いられている２０００人近くの住民（以下、住民）が東山温泉の１７か所の宿泊施設に滞在。部屋・３食・温泉は無償で提供。4/3 より受け入れが開始され、２か月以上が経過。ＧＷをピークに減少傾向。仮設住宅や借り上げ住宅への入居が徐々に進んでいる。しかし最終的な転居の期限が定まっていない現状である。

・住民と観光客の共存

東山温泉全体の７～８割の客室を住民が使用、観光客を残り２～３割でお受けせざるを得ない状況である。また、観光客のみを受け入れている施設は３軒のみで、多くの旅館で住民と観光客が共存。観光客からの問い合わせでも住民がいるのか？と聞かれる場合が多い。原瀧のような観光客を入れていない施設では、子ども達がロビーではしゃぐ自由があるが、住民と観光客を受け入れている施設では住民・観光客・そして宿も気を遣わざるを得ない。

・被災者受入れ委員会

住民の受入れに東山温泉全体で対応をすべく、「被災者受入れ委員会」が設置された。事務局は観光協会。役割としては

１．　行政からの情報一元化

２．　宿泊施設共通の受け入れ基準の設定

３．　支援物資やボランティアの受入れ調整

４．　不測の事態（事故やクレーム等）に共同で対応

５．　共同イベントの開催

これによりスムーズな受け入れを実施。

・宿泊施設の現状

宿泊施設の立場は様々である。福島県より災害救助法に基づき住民１人あたり上限５０００円の補助を得ており、風評被害による観光客の減少に伴う損失を、住民の受け入れによって最小限に食い止めているのが現状である。修学旅行は９割キャンセル。従業員の解雇や本来業務が出来ない苦悩、将来への不安、モチベーションの低下が発生。

住民の転居期限が定まっていないため、「大熊後」を見据えた営業戦略を打ち出せない。また、例年８月が最も集客の見込める時期でもあるため、難しい判断が迫られている。観光客に絞りたい施設と、住民が入ってむしろ震災前より良くなっている施設（家族経営の宿に多い）では、それぞれ立場は異なる。経営上住民を受け入れ続けたい旅館とそうでない旅館の間で対応が分かれる。現在は施設間での住民移動に向けた検討の動きも始まっている。

・「原瀧」の場合

原瀧には１９０人近くの住民が生活、観光客は原瀧では受け入れておらず、別館の今昔亭を観光客のみの空間にしている。

自治会組織「原瀧連絡会」が組織され、代表と副代表、そして各階に班長が存在。自治会により情報伝達の漏れを防ぎ、住民の要望を取りまとめて発信できるようにしている。東京電力への要望も自治会であらかじめ取りまとめたうえで要望書を提出。また、洗濯機を３台設置してローテーションで回すことにより、公平さを維持。

住民とスタッフは家族のような関係が築かれており、スタッフの制服に子供たちからもらったシールが貼られているケースも。住民・スタッフ双方で名前を呼び合う会話が行われ、スタッフは住民の細かなニーズを拾っている。お年寄りや子供には積極的に声をかけ、おかゆの量や好みを把握、学校へ行っていない小学生にも声かけをしている。

昼の食事は平均８０人。仕事や仕事探し、各種手続き、子ども達の学校等により人数

は朝晩よりは減っている。自転車を３台用意しており、外出に役立っている。スタッフは接客部の人員が震災前には契約社員やアルバイトを含めて２８名いたが、震災後は正社員の４名と他部署からの応援で回しており、残り２４名は同じグループ内の別施設（老人ホーム等）へ出向という形をとって解雇を免れている。

我々研修生がお昼出しに入ることで他部署の方が本来業務に専念できるメリットがある。

△住民が食事を取りに来る

・原瀧における日常と非日常

住民にとってもはや原瀧での生活が日常であり、非日常を提供する宿ではなくなっている。そこで、6/10（金）に原瀧では住民の夕食を「川どこ」で行った。「川どこ」とは川に近い屋外の空間で食事を楽しめる仕掛けで、１８ブロックに６名で計１０８名まで対応可。東日本では原瀧が唯一。原瀧の売りになっている施設。日常から非日常へ。同じ原瀧ではあるが、屋外・川の眺め・水の音・グレードアップした料理・炭火・お酒・暗闇等の非日常的なオープンスペースでの食事を楽しんでいました。昼出しの際の顔とは違い、心から楽しんでいる笑顔。癒しになったのではないか。

先の見通せない生活の中で少しでも非日常を味わうことで、つらいことをその時だけは忘れられる、心が明るくなる、気がまぎれる、話題が出来る、興奮する、饒舌になる等様々な効果があることを実感。

△「川どこ」風情

△「川どこ」料理。炭火焼き

・観光協会での対応

観光協会では住民の受入人数集計、観光協会周辺やトイレの清掃、日帰り入浴案内資料・共同駐車場の図面・夏祭り用こどもクーポン・自転車貸出票・ボランティア受入れスケジュール等の作成といった事務作業を行った。そのなかでも東山温泉共同駐車場のゴミ問題に取り組んだことが印象に残った。

・ゴミ問題

会津若松市より観光協会が借りている東山温泉共同駐車場。現在「いわき」ナンバーの住民の車が９割以上のスペースを使用。それまでは半年に一回の回収で済むくらいゴミが出ない状態であったが、住民使用後は大量のごみが溢れ、風で飛ぶことで近隣から畑にゴミが飛んで来て困るというクレームが発生。それを受けて 6/8（水）に住民と観光協会（事務局長と私）で共同駐車場全域の清掃を実施。蒸し暑く陽射しが強い中、住民は５０名予定が８９名の参加！非常に意識が高く、軍手やゴム手袋を自ら持参して、率先してゴミ拾いや分別を行っていた。やる事が出来る、体を動かせる、知り合いに会える、意識づけになる、町がキレイになる、気持ちが晴れる、会話が弾む、様々な効果が。その後、6/15（水）にゴミ箱用に分別を示すパネルを作成して設置、6/16（木）に清掃の結果と次回清掃の告知・無料自転車の活用とルールの確認を掲載した案内（別添資料）を作成して、住民が滞在している１７か所の施設に配布した。

日頃取り組んでいる活動の成果を分かりやすく示すことで、住民に喜んでもらえるだけではなく、観光協会への理解が深まるメリットも得られた。

しかし、スピード感が足りなかったことは課題である。清掃の余韻が冷めてからの報告では遅いうえに、次回へ繋げるにはマメなアクションを打ち出すべきであった。完璧なかわら版的なものを作ることにとらわれ、住民や観光協会にとって本当に必要なことをすることから焦点がずれてしまったことを大いに反省したい。

△分別を示すパネルを作成して設置

△観光協会の周囲を清掃

・ボランティアの申し出

観光協会はボランティアの受入れ調整も行っている。東山温泉ではボランティアや支援物資の受け入れに関しては、原則はお断りしないという立場。申し出ていただいた善意は受けさせていただくことが基本。散髪や落語・演奏・図工・芸能人のお忍び等様々な申し出があり、原則は会津若松市や大熊町の社会福祉協議会から観光協会が連絡を受け、観光協会が宿泊施設に発信、ニーズを把握して決定する。しかし直接観光協会や宿泊施設に連絡をしてくるケースも。

・ありがた迷惑化している炊き出し、缶切りがないと開けられない缶詰

ボランティアのミスマッチが発生。東山温泉には炊き出しのニーズがない。にもかかわらず２週間に１回、新潟県の団体が炊き出しを行っている。東山温泉側は原則お断りしないという立場を維持している。当該ＮＰＯがどの程度東山温泉の立場を把握しているのか。また、缶切りがないと開けられないサーモンの缶詰が観光協会に一時山積みとなった。

・東山温泉を中心とした地域研修

地域研修では会津若松の歴史スポットを調査する予定を組んでいたが、結局は東山温泉が気になり、東山温泉を中心に調査することとなった。

「昭和漫画記念館」と「会津若松冒険堂」

東山温泉にある「地酒Ｂａｒ　ほっと東山」の２階に「昭和漫画記念館」がある。かつて会津には「鉄腕アトム」や「リボンの騎士」「ジャングル大帝」等の作品でおなじみ、天才漫画家の手塚治虫氏が訪れ、東山温泉で「スリル博士」第４話を執筆。その執筆した部屋の雰囲気を再現した空間で、昭和の雰囲気や手塚氏の功績を感じることができる。

「昭和漫画記念館」

七日町には「会津若松冒険堂」があり、漫画に焦点を当てたミュージアム。昭和の漫画を集めただけでなく、手塚作品の原画や会津若松を訪れた際の写真が展示されている。また、注目される点としては運営するＮＰＯ会津漫画文化研究会が集めた資料のみならず、一般市民が所有している資料が多数寄贈されている点にある。一般市民としては確実に資料を保管して残してもらえる場として、冒険堂を頼りにしている。場の創出が好影響をもたらしている好例。

「会津若松冒険堂」

△会津若松冒険堂の外観

△ベレー帽×丸眼鏡＝手塚治虫！

△漫画本だけでなく原画も多い

まとめ

今回の研修で最も印象に残ったことは、「場」を作ることで生まれる効果、場作りの重要性である。場が出来ることで新しい出会いやドラマが生まれ、その後の人生にプラスとなる、そんな仕組みや機会が増えれば増えるほど社会が活性化されるのではと強く実感。

駐車場清掃・物産販売・川床・冒険堂・田から屋、他にも様々な場で人が集い、地域が活性化している現場を目にして、地元神戸で場や仕組みづくりを行っていきたいと決意を新たにした。また、③について触れていないが、今後の活動で以って示すこととしたい。

そして、研修中に出会った全ての人やモノ・自然・動物たちに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

会津の思い出

△お秀茶屋の田楽を縁側でいただく

△瀧の湯付近にニホンカモシカが

△東山温泉「卯之家」ソースカツ丼

△リステルのブース